

親

鸞(羽二卷)

吉川英治

親

鸞

第二卷



吉川英治

光風社版

親鸞

第二卷

昭和三十三年一月十五日 初版発行
昭和三十三年三月二十日 再版発行

定価 二五〇円

著者 吉川英治
発行者 豊島清史
印刷者 菅生定祥

発行所

株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話 東京(29)〇二三八番
振替口座東京 五六五二六番

目 次

去來篇・續

柿色の集團

青春譜

怪盜

壁文

春のけはひ

古いもの新しいもの

女人篇

風水流轉

時雨の罪

さらゝ月夜

牡蠣の使ひ

九 元 四 六 七 八

二九 三〇 三一 三二

峰阿彌がたり

一六九

白磁を碎く

二二

霧の扉

三三

大 盗 篇

あられ

三五

手長猿

三四

九十九夜

二七一

離 山

二六九

戀 愛 篇

門

三〇五

吉水夜話

三九

屋根の下

三七

装
幀

關
野
準
一
郎

親

鸞

第二卷

去
來
篇
·
續

柿色の集團

一

『はてな？』

性善坊は、雜鬧する驛路の辻に立つて、うろ／＼と、見まはしてゐた。

木津川を渡つて直ぐの木津の宿であつた。

源氏の府廳から布かれた大きな高札が立つてゐる。

その官文の前にも、範宴は見えなかつた。

汚ない木賃宿だの、馬飼の馬小屋だの、その前に立つて罵つてゐる侍だの、川魚を桶にならべて

賣る女だの、雜多な旅人の群れだのが、秋の蠅と一緒になつて騒いでゐる。

『この、阿呆つ、高い所にのぼりたりや、鴉になれつ』

と、柿賣の男が、屋根の上にあがつて遊んでゐる子どもを、引き摺り下ろして、往來の眞中で、尻を、どやしつけてゐると、その子の女親が、裸足で駈けて來て、

『人の子を、何で、打ちくさるのぢや』

と柿賣の男を、横から突く。

『てめえの家の餓鬼か。この悪戯のために、雨漏りがして、何うもならぬ故、懲らしめてくれたのが、何とした』

『雨が漏るのは、古家のせゐぢや、自分の子を、打て』

『折つたが、悪いか』

と、又撲る。

子どもは泣き喚く。

『女と思うて、馬鹿にしくさるか』

と、子どもの母親は、柿賣に、むしやぶりついた。

親同志の喧嘩になつて、見物は蠅のやうにたかつて来るし、驛路の馬は嘶くし、犬は吠えたてる。性善坊は、探しあぐねて、

『お師様あ』

と呼んでみたが、そこらの家の中に、休んでゐる様子もない。

木津の渡船で、すこし、うるさい事があつたので、宿の辻で待ちあはしてゐるやうにと、自分は、一足後から駆けつけて來たのであつたが――。

こゝに見えないとすると、もう奈良も近いので、或は、先へ氣儘に歩いて、奈良の口で待つてゐる

おつもりか？

『さうかも知れない』

性善坊は、先の道へ、眼をあげながら、急ぎ足になつた。

その足もとが、鶏に蹴つまづいた。埃をあげて、鶏が、けたましく、往來を横に飛ぶ。宿場を出ると、やがて、相樂の並木からふくろ坂にかゝつた。

その埃の白い草むらに、

西、河内生駒路、東、伊賀上野道。

道しるべの石碑が立つてゐた。

先刻からその石碑のそばに、黙然と、笈ずるを下ろし、腰かけてゐた山伏がある。

『……喉が渴いた』

呟いて、邊りを見まはした。清水が欲しいらしいのであるが、水がないので、諦めて、又むしやむしやと柏の葉でくるんだ飯を喰べてゐる。

その前を、性善坊が、急ぎ足に通つたので、山伏はふと顔を上げたが、はつと突き上げられたやうに立ち上つて、

『おいつ、おいッ』

杖をつかんで、呼びとめた。

つい、行き過ぎると、山伏はふたゝび、

『坊主、耳がないのか』

性善坊は聞きとめて、

『何？』

思はずむつとした顔いろをして振り顧つた。

傲岸な態度をもつて、自分へ、手をあげてゐる山伏は、陽に焦けて色の黒い、二十七、八の男だつた。

雨路に汚れた柿いろの襦袢を着て、金剛杖を立て、額に、例の兜巾とよぶものを當てゐた。

『なにか御用か』

性善坊がいふと、

『おゝ、用があればこそ、呼んだのだ』

『急ぎの折ゆゑ、宗法のことならゆるされい』

『宗旨の議論をやらうといふのぢやない。まあ、戻りたまへ』

甚だ迷惑に思つたが、由來、修験者と僧侶とは、同じ佛法といふものゝ上に立ちながら、その姿がひどく相違してゐるやうに、氣風もちがふし、禮儀もちがふし、教典の解釋も、修行の法も、まるで

別ものになつてゐるので、事々に反目して、僧は、修驗者を邪道視し、修驗者は僧を、佛陀を飯のためにする人間と視、常に、仲がよくないのであつた。

殊に、山伏の一派は、山法師のそれよりも、兇暴なのが多かつた。又、社會から姿をくらます者にとつて、都合のよい集團でもあつたので、腰には、戒刀とよび、また降魔のつるぎとよぶ鋭利な一刀を横たへて、何ぞといふと、それに物を云はさうとするやうな風もあるのである。」

(からまれては、うるさい……)

性善坊は、さう考へたので、面持ちを直して、

『では、御用のこと仰せられい』

と、素直に彼の方へ、足をもどして行つた。

山伏は、云ひ分が通つたことに優越感をもつたらしく、

『うむ』

と、うなづいた。

そして、近づいた性善坊へ向つて、横柄に、

『貴様、一人か』

と訊いた。

『何のことぢや、それは』

『わからぬ奴、一人旅かと、訊ねるのだ』

『連れが居る。その連れを見失うたので、急いで行くところぢや。御用は、それだけか』

『待てく。それだけの事で、呼びとめはせぬ。……では連れといふのは、範宴少納言であらうが』

『何うして、知つてゐるのか』

『知らないでか。貴様も、うとい男だ。この朱王房の顔を忘れたか。俺は、叡山の土牢から逃亡した成

田兵衛の子——壽童丸が成れの果て——今では修験者の播磨房辨海』

『あつ？——』

思はず跳びあがつて、

『壽童奴かつ』

と性善坊は見直した。

山伏の辨海は、赤い口をあいて、げたく笑つた。

『奇遇、奇遇。……だが、こゝに範宴のゐないのは残念だ。範宴は、どこにゐるか』

三

辨海と名は變つても、腕白者はやはり腕白者、壽童丸といった頃の面影が、今でも、彼の姿のどこかにはある。

『おい、範宴は、何處にゐる？………』
と、重ねて訊く。